

第16回「たばこはやめて！」(2003~04年)コンクールの審査講評

1. 紙芝居・絵本

毎年のことですが、絵本と紙芝居の区別がついていないことが気になります。特に紙芝居は、抜くことによっておもしろさが表現できます。次どうなるか、を演出できる画面構成がたいせつでしょう。紙芝居という日本のユニークな文化を大事にしてください。

厚生労働大臣賞の「おじいちゃんとたばこ」は、色の塗り方がうすく、インパクトが弱いのですが、絵そのものは味わいの深い、人間のぬくもりを感じさせる作品です。ただ、フキダシで心の内面を表現するのはマンガの技法で、紙芝居にはなじまないものです。紙芝居は遠目で見て、一目で理解できる大柄な絵が必要であり、画面の中に画面を描き込むようなやり方でなく、心の中は別の一画面とした方が良いのです。映画のカットの積み重ねと同じです。

文部科学大臣賞は該当作がありませんでした。完成度の高い、こぎれいな応募作もありました。しかし、手馴れてはいますが、どこかで見たような作品という既存感につきまともわれました。ユニークさがほしいのです。今ここで生きていること、というあたりまえの生活から生まれた存在感のある作品を期待しています。

本コンクールはテーマが決まっています、明るく、わかりやすい内容が評価され、あまりにネガティブなものは入選になりにくいので留意いただきたいと思います。また、絵は上手であるに越したことはありませんが、主催者側でライトして発刊する場合がありますので、ストーリー展開のアピール力やユニークさの方に、絵そのものより審査に力点が置かれています。(堀田 穰)

2. ポスター

2003年になって、目に見えて一段と、学校、役所、駅のホーム、乗り物、会議、銀行など、禁煙・無煙になった所が増えてきました。厚生労働省の審査員がご挨拶で「2003年5月に施行された健康増進法の受動喫煙防止の第25条で、日本社会は今「全面禁煙」に大きく舵を切っています。」とおっしゃっていた通りです。禁煙・無煙が全国に浸透しつつあり、啓発事業の必要性が減じ、コンクール応募が少なくなるかも知れないと思っていましたが、今回も全国から多くの作品が寄せられました。

美術コンクールとは少し違って、テーマが「たばこはやめて！、吸っちゃダメ！ - 家族や身近な人へのメッセージ」に限定されていて、しかも啓発活動に活用しますので、その観点から審査を進めました。わかりやすさ、訴えの強さと優しさなどの表現が大切です。

いずれの作品も、ひとつひとつに込められた熱い思いが伝わってきますが、ポスター部門の入選数に限定があるために、選定作業には審査員として誠につらいものがあります。各部門の絵を机の上に並べ、三~四次審査まで審査員の投票方式で選定を進めました。絵が必ずしも上手でなくても、またコピー(字)がもう少し大きい方が良い、とか、字の間違いがあっても書き直せるものは拾って、体験と実感に基づくユニークさや表情豊かなアピール力のある作品が上位となりました。

タバコの煙を嫌がる迷惑の目の表現が ×× や > < は表現としてありきたりで、評価の下がるをえない作品が少なく残念でした。表情の豊かさをぜひ工夫し、指導していただきたいと思います。また募集要項でもお願いしましたが、吸いすぎ注意、とか、タバコは20歳から、などのコピーは、本コンクールの趣旨からずれるので、選外とならざるを得ません。

これら入賞した作品が、次回の啓発ポスターなどのデザインに活用され、また多くの人目に触れ、社会的改善に役立てられることを楽しみにしています。(新谷隆夫)

3. マーク

マークは抽象性が高く、優れた作品となるとある程度限られてくるものです。その中でも、シンプルでわかりやすく、訴求力もあるという、洗練された作品がいくつかありました。しかし、今回はそれらにも増して、特に若い方の斬新な発想が注目を集めました。

厚生労働大臣賞は、赤ちゃんが掃除機でタバコと煙を掃除している絵柄です。マークとしてはやや

描き込み過ぎているきらいがありますが、これまでにないモチーフでしたし、ユーモラな雰囲気も好感度を上げていました。文部科学大臣省は、「禁煙」という文字の訴求に頼りすぎている感がありますが、全体の印象として、禁煙を支えている晴れ晴れとした人の存在が感じられ、これも従来にない新しい表現でしたし、若者の禁煙への心意気が象徴されているようで頼もしく感じました。

このようにマーク部門では、その完成度にとらわれずに発想・アイデアも評価するようにしていますので、これからも独創性に富んだ作品を期待しています。(高部遵子)

4 . 標語・川柳

前回は標語・川柳部門は見送りましたが、今回も多く作品が寄せられました。今回のテーマは、無煙環境が進展・普及しつつあることから、「家族や身近な人へのメッセージ」としました。それらの中から、作品としてはやや平凡ながら、てらいなく率直に無煙・禁煙を訴える子どもたちの作品に高い評価が集まりました。

厚生労働大臣賞は、小学3年生がお父さんと一緒に考えた合作です。二人でいろいろと話しながら考えているうちに、タバコに関する最大の思いやりは、やはり「吸わないこと」に尽きるという結論に至ったのでしょうか。協同する親子の睦まじい姿、会心の作ができあがったと喜んだであろう微笑ましい姿が浮かんできます。文部科学大臣賞は小学1年生の作品です。「はなまるかぞく」という流行語感覚の言葉を上手に効かせながら、家族のありのままをストレートに吐露(とろ)しているようで、好感が持てました。

無煙環境は家庭から。社会常識は家庭教育から。そして、親は子どもにとって一番身近な大人のモデル。そんな当たり前の大切な基本を感じさせる大臣賞2作品でした。(高部遵子)

5 . メッセージ

昨年に続き、今回もメッセージ部門を募集しました。文章の審査は、絵とは違ってじっくりと読み、訴えかけるものを評価する必要があり、審査はたいへんでした。家族や周りのタバコに困っている、また親の健康を心配して「禁煙して欲しい」など、子ども達(未成年者)の切実な訴え(メッセージ)が汲み取れる作品かどうか、にポイントを置いて選定しました。

知識を述べるだけでは作文であってメッセージとはなりません。結果的に、個々人の体験にもとづく訴えかけ(メッセージ)を、家族や喫煙者、また社会に発信する作品が入賞として選ばれました。(事務局審査員・野上浩志)